

カール・マルクス著
フリードリヒ・エンゲルス編
長谷部文雄譯

資本論

經濟學批判

第一部
上冊

青木書店版

譯者はしがき

これは、青木文庫版に收められている拙譯『資本論』の擴大上製版である。というよりも、これをそのまま縮刷したものが青木文庫版である。『資本論』は、價格の低廉と携帯の便利の點から文庫版を要求すると同時に、長期にわたる保存および反復精讀にたえる上製本をも必要とする。しかし、兩者の組方が相違することは、参照を不便にするので許されない。そこで、出版者と協議して採用したのがこの形式である。

この書のための手引かないし解説は、すでにインステイト版の序文およびレーニンの『カール・マルクス』があるので、譯者として今さら蛇足を加える必要はないであろう。ただ一つ私が重ねて強調しておきたいことは、この書の目的が近代的社会の經濟的運動法則の暴露にあり、資本制的生産様式の發生・發展・および消滅の法則の解明にあるということである。最大の眼目は論理的論理にあるのではなく、歴史的論理にある。個々の抽象的理論や範疇の一應の理解は別として、『資本論』のこの根本精神をつかむためには、どうしても『資本論』そのものと直接に取組むほかないであろう。さらに吾々は、單なるものしりになるためにでなく、行動の指針をえるためにこの書を読まねばならぬとすれば、この書でえた知識をもって今日の世界および日本の現實の事態を正しく認識しうるのでなければならぬ。資本制的生産が『地球上で例外的にのみ支配的に行われ』（第一部、八一六頁）ていた百年も昔に著されたこの書が資本制的生産の根本的運動法則をいかに正確

に分析しているかは驚歎する他ないが、この書の理論を今日の具體的現實に適用するためにはなお多くの歴史のおよび理論的な中間項を必要とする。そのためには、本書で極めて大きな部分を占める歴史的敘述およびブルジョア經濟學批判において、具體的事實を正しく把握し正しい理論をうちたてるための唯一の方法、唯物辯證法を學びとて吾がものとせねばならない。そのためにも、この書の方法・理論を正しく攝取し適用し發展させたエンゲルス、レーニン、スターリン、毛澤東に學ぶことが必要であらう。この書の理論は、すでに事實として世界的・客觀的に證明されており、また日々その證明を強化されている。しかし、これを實踐に役だつ知識として吾がものとすることは必ずしも容易でなく、吾々はなおマルクスの次ぎの言葉を忘れてはならぬであらう、——『學問にとつては平安の大道はない、そしてその嶮艱な小徑をよじ登るに疲れることを厭わない人々のみが、ひとりその輝ける絶頂に到達する仕合せをもつのである』と。（第一部、八八頁。）

この翻譯は一九四六年十月から五〇年八月にわたり日本評論社から刊行された拙譯『資本論』全三卷（十一分冊）を改譯したものであり、この版では第一部上下二分冊、第二部一冊、第三部上下二分冊、計五分冊として刊行し、第四部『剩餘價值學說史』はモスクワの新版によつて改譯したものを上中下の三分冊として續刊の豫定である。索引は一應全三卷だけの統一的索引——その原稿は協力者、鬼塚安雄との共編として出來あがっている——を別冊として出版し、將來、第四部『學說史』を含む一そう詳細なものを編纂する豫定である。もとく私は、第四部を譯了刊行したのちにこの改譯を企てるつもりであったが、事情に餘儀なくされて今度の早急な改譯となった。しかし、その結果として分かったところでは、ありうべき局部的誤解などを別とすれば、私の力ではもう本

質的な改譯の餘地がないようである。大方の叱正によるものや自ら氣づいた誤りは今後も機會あるたびに改訂し、また、將來いつか企てられるべき多數専門家の協力による改譯のための準備は怠らぬつもりであるが、私個人としてはこれをもって決定版とし、第四部完結のうへは残る何ほどのエネルギーを次ぎの仕事に注ぎたいと思う。

日本評論社の研究者版第一分冊（一九五〇年七月）の譯序で私はつぎのように述べた、――

『このさい、翻譯にたいする私の根本的態度を明かにしておくことが必要であらう。私はこの翻譯を、何よりも學者としてのではなく、何よりも職人としての仕事と考えている。というのは、「資本論」を解釋するのではなく……そのありのままに日本語に寫し出す態度である。もちろん、この仕事を忠實に果たすためには、マルクスの方法と理論とに即應してまず解釋をくだすことが必要であるが、この解釋は、原文のありのままの姿を忠實に……再現するためのものでなければならぬ。』

……尤も「資本論」を日本語に翻譯することは、語系の相違のために、これを英、佛、露語などに翻譯するよりもはるかにむずかしいと思われる。殊に、エンゲルスが「解釋上ほんの僅かでも疑問の残った文章は、むしろ全く言葉どおりに印刷されている」（第二部序言）といった第二部以下を、誤りなく日本語に翻譯することは不可能に近いであらう。だが、これを可能なかぎりにおいて實行しようとする私の熱意だけは、少くとも英、佛、露譯者に劣らぬものと自負している。』

『拙譯にたいしては、しばしば、まだむずかしいという批評をうけた。この批評については、私はある意味では肯定し、ある意味では抗議する。引用文はもとより、マルクス自身の文章中でも嚴密な理論的敘述でない部分に、まだ日本語になりきっていないところがあるということは私みずか

ら知っている。そうしたところがあるのは、もとより私の微力のいたすところであるが、もし辯解を許されるならば、一つには次ぎの理由——すなわち、平易を第一眼目にして譯文をくずしている、と、いつの間にかイージーゴーイングに流れてしまつて、平易を犠牲にしても嚴密でなければならぬ箇所……を俗流化したり、むずかしいが正確な表現を歪曲・曖昧化したり、また第二部以下では疑問の文章を胡麻化して勝手に解釋してしまつたり、する危険が大きいという理由——のせいでもあつた。』

『もし、こうした翻譯態度から生ずる拙譯の堅さ、むずかしさが非難されるのだとすれば、私はその非難に服しえないのみならず、むしろ拙譯には、平易におもねつて俗流化・歪曲化したところが多々あるのではないかとおそれるのである。その意味では、私は、拙譯を決定版に高めるには、一そう平易化すると同じ程度に、一そう嚴密化する必要があるものと信じている』云々。

こんどの改譯では、譯語・譯文の統一のほかに、この『一そう平易化すると同じ程度に、一そう嚴密化する』ことに微力をつくした。第二—三部にくらべて第一部、殊に第一篇は、一字もゆるがせにしないで再現したいと努めたために、——これは、この部分がマルクスによって推敲しつくされ、また理論的にも最も嚴密を要する部分だからである、——初めての讀者にとっては必ずしも平易ではないであろうが、それを我慢して讀んで貰えば、必ずその効果はあるものと信ずる。

顧みれば、私のこの譯業の進行は決して順調ではなかった。まず私は、一九二八年（昭和三年）に、五社連盟版『マルクス・エンゲルス全集』（岩波書店と弘文堂を中心とする五社で計畫され、改造社版『全集』に對立するもの）で『資本論』を擔當された河上肇先生のもとで第三卷の下譯を

ひきうけたが、これは『全集』そのものが中止されたために刊行されるに至らなかった。『原文對譯資本論初版首章及附錄』（大原社會問題研究所編、弘文堂・同人社版、一九二八年）および『資本論初版鈔』（岩波文庫、一九二九年）はその前後の私の勞作である。それ以前から河上先生は宮川實君との共同事業として『資本論』の翻譯を企てられ、一九二七年以降岩波文庫から五分冊（第八章まで）出版されたが、これも故あって中止され、先生が三三年（昭和八年）に檢舉されるまでには改造社から第一卷上冊（第十二章まで）が出版されたにすぎない。私も同年檢舉されて同志社大學教授の職を失ったが、一年たらずで出所した。そこで私は、微力をつくして『資本論』（『學說史』も含めて）を翻譯してみようと決心した。當時すでに情勢が相當惡化していたので、官立學校の教授だった宮川君にとってこの仕事は危険だったのである。また私は、河上先生がこの翻譯事業に非常な關心をもっていたことをよく知っていたが、先生がこの仕事にたえる健康を維持されて五年の刑期を終えられる希望はもちろん、無事に歸られるか否かさえ疑問であった。屍をこえて進むなどという表現は仰山でもあり、實感でもなかったが、先生が心がけられた譯業を私なりにでも完成することは、先生の學恩に報ゆる意味がなくもない、という氣もちであった。ところが、一日十五時間勞働を目標に精出したので仕事は大いに捗ったけれども、出版の方は思わしくなかった。そのころ私は、岩波文庫に星で二十ばかりマルクス主義文獻の翻譯をしており、他には關係のある書店もなかったのとおりあえず岩波書店にもちこんだが、ついに引受けて貰えず、友人、堀江邑一君の紹介によりナウカ社と契約した。しかし、一九三六年（昭和十一年）の夏に第一部上冊の印刷が終ったとき、その製本ができぬうちに大竹博吉氏が檢舉されてナウカ社の解散となり、この出版は（刷本

一部を製本したものが私の手許にあるだけで）ついに實現されなかった。そこでまた、堀江君を煩わせて日本評論社と契約し、翌三七年に第一部上下二冊が出版されたのであるが、この年はいわゆる蘆溝橋事件により日本が最後の中國侵略を開始した年であって、情勢は急激に悪化し、三八年にはもう第二部以下の出版が許されなかった。そしてこの年の夏に私はふたたび檢舉された。しかし、あの當時なおしばらく出版の自由が假りにあったとしても、とうてい體力的に完成できなかったであろう。戦後ふたたび日本評論社と契約して、全三卷完結まではまず順調にすすんだが、不幸にも繼續完遂の見込みが立たなくなり、ついに同社の諒解をえてこの事業を青木書店に移すことになった。青木春雄氏のすぐれた事業的手腕と出版的良心とによってこの事業の完遂が約束されたことは私の最も仕合せとするところである。しかし、なお將來いろいろの困難がないとは云えない。學問のために、大方の御支援をお願いする次第である。

最後に、河上先生の大いなる學恩と、二十五年の昔に『資本論』全三卷のすぐれた譯業を完成された高畠素之氏と、私の仕事に多大の援助を與えられた多數の同學諸君とに、心からなる感謝と敬意を獻げたい。

一九五二年盛夏、今治市近見山麓にて

長谷部文雄

凡 例

一、本譯書のテキストは、モスクワの M・E・L インスティテュート出版のドイツ語大衆版（一九三二—三四年）である。

二、活字に傍點を付したところは、初版で隔字體になっているところであつて、インスティテュート版では斜體になっているところに當る。但し、初版およびロシア語版（一九三四年）を照会した結果、この譯書では、インスティテュート版で斜體になっていないにも拘わらず傍點の付せられた箇所が、かなり多い。その逆の箇所も少しある。また、フランス語版から挿入された部分における強調、および英語版でのエンゲルスによる強調も（インスティテュート版では斜體）、傍點で表わされてある。ゴチック體は、第四版でエンゲルスにより隔字體にされた箇所を表わし、ゴチック體に傍點を付したのは、初版および第四版で隔字體にされてある箇所を表わす。

三、欄外下端の括弧内の數字は、インスティテュート版の頁を示す。但し、組方の相違のために註の所在頁は度外視されている。

四、引用文の譯出について。——マルクスが原語で引用したものはそれを基礎とし、インスティテュート版のドイツ語譯を参照しつつ譯出した。兩者の間に大きな相違のある場合には前者に従った。マルクスがドイツ語に譯して引用したものはそれを基礎とし、原文（手近にあるものは）を参照しつつ譯出した。兩者の間に大きな相違のある場合には、前者に忠實なることを旨

とした。

五、フランス語版への序言および後書きはフランス語版にもとづき、英語版への序言は英語版にもとづいて譯出した。

六、フランス語版から幾つかの、ドイツ語版と異なる表現を譯者註として採り入れたのは、ドイツ語版の表現のむずかしさを緩和する目的のために他ならない。

七、引用文獻の發行年代、頁付などで角形の括弧に收めたもののうち、ドイツ語のインスティテュート版にないものは、ロシア語のインスティテュート版その他から補った。

八、引用書の表題がテキストで略記されてあるものは、ばあいに応じて、その省略された言葉を補ったところがある。

九、角括弧に入れた註は、編集者と明記していない限り、すべて譯者註である。

十、譯者註のうちには、インスティテュート版の附録の外來語目録によったものがある。

十一、『資本論』中の頁を引用した箇所で數字の上に『原』と付記してあるのは、インスティテュート出版のドイツ語版の頁を示す。

十二、『編集者』とあるのは、もちろん、すべてインスティテュート版の編集者である。

目次

序	文 (M・E・L 研究所)	一
カール・マルクス (レーニン)		三
第一版への序言 (マルクス)		六
第二版への後書き (マルクス)		五
フランス語版への序言および後書き (マルクス)		八
第三版のために (エンゲルス)		九
英語版への序言 (エンゲルス)		四
第四版のために (エンゲルス)		一〇

第一部 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣

第一章 商 品	一三
---------	----

第一節 商品の二要因——使用價值と價值（價值の實體、價值の大きさ）	一三
第二節 商品で表示される労働の二重性格	二三
第三節 價值形態または交換價值	二三
A、簡單な・單獨な・または偶然的な・價值形態	二三
一、價值表現の兩極、——相對的價值形態と等價形態	三四
二、相對的價值形態	三六
(a) 相對的價值形態の內實	三六
(b) 相對的價值形態の量的規定性	四二
三、等價形態	四六
四、簡單な價值形態の總體	五三
B、全體的な・または開展された・價值形態	五七
一、開展された相對的價值形態	五七
二、特殊的な等價形態	五九
三、全體的な・または開展された・價值形態の缺陷	五九
C、一般的な價值形態	六一
一、價值形態の變化した性格	六一
二、相對的價值形態と等價形態との發展關係	六五
三、一般的な價值形態から貨幣形態への移行	六七

D、貨幣形態……………一六八

第四節 商品の物神的性格とその祕密……………一七〇

第二章 交換過程……………一九一

第三章 貨幣または商品流通……………二〇五

第一節 價値の尺度……………二〇五

(價格、三〇六、——價格の度量基準、三〇、——價格の一般的な騰貴または下落、三三、——貨幣の計算名、計算貨幣、三四、——價値の大いさと價格との量的不一致、三七、——それらの質的不一致、三八、——價格は商品の觀念的な價値形態、三九)

第二節 流通手段……………二一〇

(a) 商品の姿態變換……………二二〇

(循環W—G—W、三三、——販賣W—G、三三、——購買G—W、三六、——商品の總體的姿態變換、三三、——商品流通、三三、——商品流通と生産物交換との區別、三三)

(b) 貨幣の通流……………二三五

(商品の姿態變換と貨幣の通流、三三、——貨幣の二度の位置變換、三六、——通流する貨幣の分量、三九、——通流速度、三四、通流の敏速と停滯、三四、——通流する貨幣の分量を規定する諸要因、三四六)

(c) 鑄貨、價值章標 二五〇

(鑄貨と地金、鑄貨の磨損、二五〇、——銀製および銅製の表章、二五三、——紙幣、二五三、——強制通用力をもつ紙幣流通の法則、二五四)

第三節 貨幣 二五七

(a) 貨幣蓄藏 二五八

(b) 支拂手段 二六五

(c) 世界貨幣 二七六

第二篇 貨幣の資本への轉化

第四章 貨幣の資本への轉化 二八三

第一節 資本の一般的範式 二八三

第二節 一般的範式の諸矛盾 二九七

第三節 勞働力の購買と販賣 三〇四

(『自由な勞働者』、三二五、——勞働力の價值、三三〇、——商品『勞働力』の獨自な本性、三三四)

第三篇 絕對的剩餘價値の生産

第五章 勞働過程と價值増殖過程 三九

第一節 勞働過程……………三元

(勞働過程、三九、——勞働對象、原料、勞働手段、三二、——生産手段、三三、——生産的消費、三八、——資本家による勞働力の消費過程としての勞働過程、三四)

第二節 價值増殖過程……………四三

(價值形成過程、三三、——勞働力の價值と勞働過程におけるその價值増殖とは大いさが異なる、三三、——價值増殖過程、三五、——資本の發生、三五)

第六章 不變資本と可變資本……………三六

第七章 剩餘價值率……………三七

第一節 勞働力の搾取度……………三七

第二節 生産物の比率的諸部分での生産物價值の表示……………三八

第三節 シーニョアの『最終一時間』說……………三九

第四節 剩餘生産物……………四〇

第八章 勞働日……………四〇

第一節 勞働日の限界……………四一

第二節 剩餘勞働に對する渴望。工場主とボヤール……………四二

第三節 搾取の法的制限をかくイギリスの産業諸部門……………四四

(レース製造業、四三、——製陶業、四六、——マツチ製造業、四八、——
壁紙製造業、四九、——製パン業、四三、——鐵道經營、四八、——婦人服
裁縫業、四〇、——鍛冶業、四三)

第四節

晝間労働と夜間労働。交代制

(冶金および金屬工業、四五)

第五節

標準労働日のための闘争。十四世紀中葉から十七世紀末までの勞
働日延長のための強制法

(労働者の健康および壽命に對する資本の無顧慮、四七、——イギリスの
労働者條例、四六、——大工業の時代に至るまでの十八世紀における労働
日の制限、四七)

第六節

標準労働日のための闘争。労働時間の強制法的制限。一八三三—
一八六四年のイギリスの工場立法

(一八三三年の條例、四七、——一八四四年の條例、四三、——一八四七年
の條例、四六、——一八五〇年の條例、四九、——絹工場、四九、——捺染
工場、五〇、——染色工場と漂白工場、五〇)

第七節

標準労働日のための闘争。イギリスの工場立法が他國に及ぼした
反作用

第九章 剩餘價値の率と分量

序 文 (M・E・L 研究所)

『資本論』のこのドイツ語民衆版は、カール・マルクスの第五十回忌の少し前に、そして第一巻の出版後六十五年目に、出版される。この著述の世界史的意義が今日以上に明白に現われたことは嘗てない。この半世紀間の歴史は、マルクスによって発見された資本制的生産様式の運動諸法則がいかに抵抗すべからざる力をもって自己を貫徹するかを、明かにした。

『マルクスが半世紀前に彼の「資本論」を書いたときには、たいていの経済學者は、自由競争を一の「自然法則」だと考えていた。御用科學はマルクスのこの著述を黙殺しようとしたが、そのマルクスたるや、資本主義を理論的および歴史的に分析することによって、自由競争は生産の集中を生みだし、しかもこの集中はその發展の特定の段階において獨占を生ぜしめる、ということを證明したのである。獨占はいまや事實となった。經濟學者たちは、山なす書物を書いて獨占の個々の現象を描寫しながら、他方では、從來どおり異口同音に「マルクス主義は論破」されたと公言している。』

一九一六年のレーニンのこの言葉は、マルクスによって発見された資本制的蓄積の一般的法則にも完全に當てはまる。御用科學や修正主義者たちばかりでなく、もとの第二インターナショナルの